

様式1 (研修の概要)

東京大学大学院 人文社会系研究科 次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣

帰国報告

(モスクワ国立大学国際教育センター 国際夏季語学講座)

2011年9月16日  
東洋史学研究室 修士1年  
金 京錫 (キム ギョンソク)

(1) 派遣先の研修プログラムの基本情報

(ア) 国名・都市名：ロシア・モスクワ

(イ) 研究教育機関名：Центр международного образования МГУ (ロモノーソフ記念モスクワ国立大学国際教育センター)

(ウ) プログラム名：Программы по русскому языку (国際夏季語学講座)

(2) 派遣期間：2011年7月22日～2011年8月22日，32日間

(3) 研修スケジュール

7/22(金)	成田出発，モスクワ到着，入寮
7/25(月)	Вступительное тестирование для определения уровня владения русским языком (ロシア語授業プレイスメントテスト)
7/26(火)	授業開始 ● Занятия по русскому языку (ロシア語授業)：月～火 10:00～11:20, 11:40～13:00, 13:40～15:00, 水～金 10:00～11:20, 11:40～13:00 ● Экскурсия (見学)：金曜午後
7/29(金)	Экскурсия в Новодевичий монастырь (ノヴォデヴィチ修道院見学)
8/5(金)	Экскурсия в Коломенское (コロームンスコエ見学)
8/12(金)	Экскурсия по музею «Мемориальная квартира А. С. Пушкина на Арбате» (プーシキンの家博物館見学)
8/19(金)	Экскурсия в Третьяковскую галерею (トレチャコフ美術館見学)，授業終了
8/21(日)	退寮，モスクワ出発
8/22(月)	成田到着

## 帰国報告

(モスクワ国立大学国際教育センター 国際夏季語学講座)

2011年9月16日  
東洋史学研究室 修士1年  
金 京錫 (キム ギョンソク)

### (1) 当初の計画の概要

私が研究している18世紀後半の中国黒龍江は、ロシアと密接に関わっている。今回の推奨プログラムの参加にあたって、私は自分の研究に必要なロシア語能力の向上、ロシア現地の情報収集を期待していた。具体的に期待していたことは次のとおりである。①ロシア語史料、ロシア語研究文献の読解力向上、②ロシアの文書館、図書館に関する情報収集、③これからのロシア現地調査に役立つべくロシア語会話やロシアの習慣に慣れること。

### (2) 実際に達成された成果

当初の計画①、すなわちロシア語読解力向上に関しては、成果が大きいとはいえない。現地で受けたロシア語授業は基礎文法事項の反復練習が中心であったが、4週間の短い授業期間では専門書の読解に必要な高度な文法事項まで学ぶことはできなかった。しかし、読解速度の向上は感じている。当初の計画②、すなわちロシアの文書館情報収集に関しては、一定の成果があった。モスクワ所在のロシア帝国外交文書館(АВПРИ)とサンクトペテルブルク所在のロシア国家歴史アーカイブ(РГИА)には直接行って位置を確認した。しかし、8月は休館だったため、入館はできなかった。当初の計画③、すなわちロシア語会話やロシアの習慣に慣れることに関しては、大きな成果があった。モスクワに到着して初めの10日間、私はロシア語が全く聞き取れなかった。しかし、派遣期間が終わる頃には、ロシア人の話す大意がわかるようになった。また、ロシアの行政サービスなどにも慣れてきた。

### (3) 感想

私にとって今回の派遣は初めての非東アジア世界体験だったので、感じたことも少なかつたが、ここでは感想を3点だけ述べる。一つ、ロシア語を十分習得するには研修期間が短かった。研修が終わった今なおロシア語で自分が言いたいことを言える自信はない。更に2~3か月は欲しかった。二つ、ロシアの顧客サービスは日本のようにきめ細かではなかつた。例えば、ロシアで外国人は外国人登録をしなければならないが、これに関して受け入れ機関は私に何の説明もしてくれなかつた。また、私がロシア帝国外交文書館を訪れた際は、建物の外に文書館であることを示す標識が全くなく、建物を探するのに一苦労した。ロシアで失敗しないためには、下調べがとても重要であろう。三つ、ロシア自体に関する興味が湧いてきた。私が今回ロシアへ行ったのはあくまでも中国史研究のためであった。しかし、博物館で帝政ロシアの国力を物語る遺物を見て、またソ連の遺産が今も町の至る所にそのまま残っているのを見て、ロシアという国自体に関する興味も湧いてきた。

最後に、このような貴重な体験をさせて下さいました東京大学に、感謝の意を表します。